

# 髪長比売の物語について

## 一

応神記に記載される髪長比売<sup>ハシ</sup>の伝承は、四首の歌を含む妻争いの物語である。物語は、南国の美女と誉れ高い髪長比売を、時の権力者である応神天皇が召されたことから始まる。難波津にいる髪長比売を大雀命がみそめて、宴席で天皇から賜わるのである。一方、応神紀にも髪長比売物語は記載されている。しかし、わずかに記の所伝とは異なる点がある。

第一点、物語中、記には建内宿禰大臣が登場する。第二点、一首目の歌（記43歌謡と紀35歌謡）の語句が違う。第三点、二首目の歌（記44歌謡と紀36歌謡）の歌い手が違う。第四点、記44歌謡の「今ぞ悔しき」の有無である。ここでは、記紀を通

## 室田 智子

してこれら四点に注目し、この二首（記43・44歌謡と紀35・36歌謡）の原形を考え、更に物語との結びつきを考えて、どちらの所伝がより濃く古い形体を残しているか考察してみたい。

## 二

ここに一首目の歌謡を書き並べてみる。

爾に御歌日みしたまひしく、

いざ子ども 野萩摘みに 萩摘みに 我が行く道の 香  
ぐはし 花橘は 上枝は 鳥居枯らし 下枝は 人取り  
枯らし 三つ粟の 中つ枝の ほつもり 赤ら嬢子を

いざささば 良らしな (記43歌謡)

とうたひたまひき。

時に大鷗鶴尊を偽して、髮長媛を指したまひて、乃ち歌して曰はく、

いざ吾君 野に蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道に 香  
ぐはし 花橘 下枝らは 人皆取り 上枝は 鳥居枯ら  
し 三粟の 中枝の ふほごもり 赤れる嬢女 いざさ  
かばえな (紀35歌謡)

宴席で歌うにしては余りにも野外的雰囲気を持つこの歌謡は、従来物語と切り離して独立歌とする方がよいとされる。

「いざ子ども云々」は、老人が春菜摘みに若者たちを誘う言葉であり、老若男女が一緒になって、はしやきながら行く道の路傍にある花橘の叙述から、赤ら乙女を率寝ることを勧める言葉に転換してゆく手法は、この歌が野遊びにおける老人(男)の勧誘の歌であることを物語っている。

という土橋寛氏の説は、記43が歌垣の歌であることを物語っている。更に「物語から切離して虚心にこの歌謡をみれば、へさあみんな、野遊びに出かけよう。花橘の下道をゆくこの野遊びには、それに相応しい美しい乙女と連れ立って行ったら、さぞ

楽しからう」と云った、一般性のある、素朴な庶民感情を説いた内容のものである。」という山路平四郎氏の説や「紅顔の美しい嬢子を誘って蒜摘みに郊外に遊びたい、そういうことを勧める目的の歌の中に、忘れ難い嘗ての記憶を想起して歌ったのである。」という相磯貞三氏の説からも、この歌謡が春の初めの山遊び・野遊びにおける勧誘歌であって、庶民的な香りの高いものであることがわかる。

ではまず、この歌謡について記紀で異なる「子ども」と「吾君」、「ほつもり」と「ふほごもり」、「いざささば 良らしな」と「いざさかばえな」の語を検討しながら、この歌謡の原形を考えてみたい。

「子ども」について『評釈』に、「自己の子弟や配下を仲間意識をもつて親しく呼ぶ語」とある。また『全注釈』<sup>記43</sup>には、「年齢的・身分的に下位の者に対する親称」とあり、歌垣では老人が若者に呼びかける言葉と考えられる。「ほつもり」は『全注釈』が「前後の文脈からすれば、花橘の『中つ枝』の花の美しさを述べるとともに、若い乙女の紅顔を形容する語であるが、語義が確定しがたい。」といい、有坂秀世氏の『上代音韻考』から「ポット赤らんでゐるといふ風な意味の擬態語ではないかと思ふ」という説を引かれ、「中の枝だけに残っ

ているその花のような、紅顔の乙女」とのみ口語訳されている。「ふはごもり」は、『厚顔抄』の「合隠ナリ。神代紀ニ、含ノ字ヲフムト点セリ」とあるのに従っていいと思われる。諸説それに従って口語訳されている。「いざささば 良らしな」は、「いざささば」に三つの意見があって、『伝記』・『言別』のいう「いざささ」を誘う意の動詞「いざさす」の未然形とする説、『全註解』の誘う意の感動詞イザを働かせた動詞「イザス」を仮定し、その未然形イザサに敬語助動詞スと仮定の助詞バが接続したものとする説、『全講』の「イザ ササバ」として「ササバ」は「書紀のササバは、動詞栄クであるふから、橘の譬喩がなお残って頭髮にさす意」とする説である。どちらにしても未詳語である。「いざさかばえな」も未詳語であるが、従来「さあ栄え映えてくれよ」という意にとる説が多い。この歌謡の意味はほとんど同じで、『記』は「さあお前達野蒜摘みに行こう。蒜を摘みに私達が行く道の香妙しい花橘は、上の枝は鳥が留って花を散らし、下の枝は人が取って散らし、中の枝は鳥に残っている花のようなほほの紅い乙女を誘うといよ。」となる。土橋寛氏は、この歌を歌垣の時の老人の勧誘歌であろうとする。そして『記』から『紀』へと変化したとするのである。確かに「いざ子ども」の方が、歌垣の歌としては原形に近いよ

うに思われる。しかし、元来歌垣の歌であったのだから、物語の中にそのまま入れたのではつじつまが合うはずはないのである。更に天皇が皇太子に対して歌った歌として取り入れたはずであるのに、『紀』にわざわざ「いざ吾君」として、意味の通らないようにするだろうか。また「いざさかばえな」とは一体どう解釈すればよくなるのだろうか。

そこで私は『紀』の歌謡を本来は歌垣で女性が歌う歌と考えてみたいのである。それというのも「君」は女性が親しい男性に対して呼ぶ呼称であり、「吾妹」が男性から女性への呼称であるのならば、「吾君」が女性から男性への呼称であると言ってもさしつかえないと思われるからである。すると歌意は「さあ私の愛しい人、野蒜を摘みに行きましょう。蒜を摘みに私達が行く道に香妙しい花橘が咲いている。下の枝は人が皆取ってしまい、上の枝は鳥が止まって散らしてしまつた。中の枝に残っているその花のようなほほを紅くした乙女。さあ栄え映えてくれよ。」となる。これは、これから男性と関係を持つという時の、まだ初々しい乙女が、男性と関係を持つことによつて、これから大人として香るような女性になっていくといった意味を含んだ歌ととれないだろうか。そうすれば、この歌には「まだ手のついていない中の枝の蕾のように、まだ誰のものでもあ

い私は恥じらつてほほを染めています。さあこれからは大人の女性として成長し、榮えて香ぐわしい花橋のように映えてくれよ。」といった女心を、その歌の言葉の裏側に隠していると思うことはできないだろうか。

### 三

続いて記44歌謡について考察してみる。

又御歌日みしたまひしく、

水溜る 依網の池の 堰代打ちが 挿しける 知らに 尊  
繰り 延へけく 知らに 我が心しぞ いや愚にして 今  
ぞ悔しき (記44歌謡)

とうたひたまひき。

是に、大郎御尊、御歌を蒙りて、便ち髪長媛を賜ふこと得ることを知りて、大きに悦びて、報歌たてまつりて日したまはく、

水溜る 依網池に 尊繰り 延へけく 知らに 堰代築く  
川俣江の 菱茎の さしけく 知らに 吾が心し いや  
愚にして (紀36歌謡)

これも前述の歌謡と同様、独立歌として考えられ、やはり歌垣の歌であろうとされている。いまここで語句をそのまま素直に受け取って解釈すると、依網の池でじゅんさいを探る人の歌であることがわかる。更に「刺す」や「延へけく」や「悔しき」などの語を考え合せると、依網の池の堰代打ちにこと寄せて、自分が想いを寄せる乙女は、すでに他の男の人が想いを寄せていて、それに気付かなかった自分の愚かさを強く責める意味を比喩的に歌い込んだ歌であると思われる。おそらくは民謡的なものである。民謡的なものであるということは、人々に広く歌い継がれている歌謡であるということ、古代の人々がよく引き合いに出して歌う歌謡であり、しかも男女間のことが取り沙汰されているといえ、第一に歌垣の時に歌われる歌謡が思い浮かんでくる。ただし、この歌謡の場合、「依網の池」という地名より考えて、この地方の歌垣で歌い継がれていたものであらうと思われる。この歌謡についても土橋氏は、『万葉集』巻七・一三三七の

葛城の 高間の草野 早知りて 標刺さましを 今ぞ悔しき

という歌を取り上げて比較されていて、次の様に述べられてい

る。

女を自分のものにするのを「草野」に標を刺すとか、標繩を張ることに譬えたり、草を刈ることに譬えた歌が万葉集には多いが、これは女を管・薄などに譬えることと共に、草薙りが恋の場であったことに基づくもので、草薙りの入会地にはあらかじめ各目標を刺したり、標繩を張ったりして、目じるしにするところから、右のような譬喩の方法が生まれたのであった。民謡における喩と被喩との関係は、觀念的な類似に基づくよりも、生活の場における近接関係によるところが大きいのである。右の歌は依網の池に堰杣を刺すことや、葦が水中に延えていることに譬えてあるが、これは草薙を場とする譬喩の方法の応用であろうと思われ、所伝のような応神天皇の歌としては、譬喩に必然性が認められないが、依網地方の歌垣の歌とすれば背かれるのである。<sup>註10</sup>

そして、また他にも『万葉集』三九四、四〇一、三二七二の歌も列挙されて、『全注釈』<sup>註11</sup>に、

「標を結ふ・刺す」というのは、単に心を寄せるのではなく、公然と自分のものにするのであって（具体的には情交をかわずこと）、「堰杣打ちが刺しける」もおそらくその

意味である。とすれば皇太子が一方的に心の中で思っているだけの譬喩に用いたのは、やや違例の用法ということになる。「我が心しそいや愚にして今ぞ悔しき」という言葉は、右の第三・四首めのような場合、つまり心を寄せながらもたもたしているうちに、他の男に先手を打たれたような場合に言われるべき言葉であろう。この歌はしたがって、

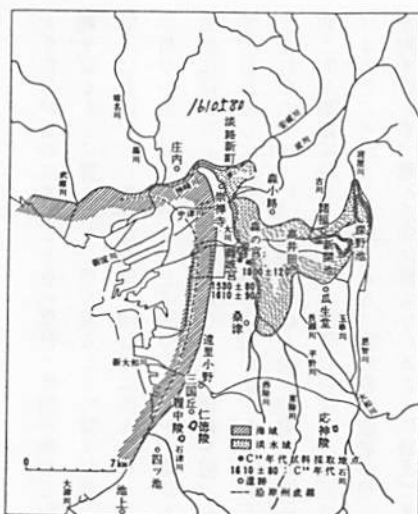
独立歌謡が物語に結びつけられたものと見られるのであり、それは依網地方の歌垣の歌ではなかったかと思う。と考察されているのである。つまり、これは依網地方の歌垣の時の歌で、依網池に集まってきた人々に恋の教訓を歌に托して、その人々に後悔のないように恋をしまさいと、おそらくは老人が歌っていたものであろうというのである。

さて、依網という地名については、『全講』『全註解』『全注釈』（記紀詞編）『評釈』の諸注釈書及び『東成郡誌』『大阪府全志』などの地誌などに記述されている。その中の『全注釈』<sup>註12</sup>には、

ヨサミは地名で、『和名抄』に河内国丹比郡依羅郷、摂津国住吉郡大羅郷があり、依羅の池を作った記事も『古事記』の崇神・仁徳天皇の条、『書紀』の崇神六十二年・推古十五年の条に見える。『摂津志』に「依羅池在庭井村、俗呼之右衛門池、其三分二為新大和川。当今広六百六十

余歩」とあるが、庭井村はいま大阪市住吉区庭井町で、ここに府社大依羅神社がある。古代には大和川は石川を合わせて北流し、その末は淀川の下流と合流していたため、中河内郡一带は湖沼状態をなし、その周辺の農民は、長くその氾濫に悩まされてきたが、……(略)……。

とある。しかし、これを歌垣の歌とするならば、池の周囲で歌垣を行ったことになる。水辺での歌垣については、『常陸国風土記』に磯で行われたことは記載されているが、池のほとりと比べると見当らない。そこでこの辺りの地形を見ることにする。



河内湖1の時代(約1800~1600年前・弥生時代(後期~古墳時代前期)の古地理図

紀元三世紀頃弥生式時代が終わり、古墳時代へと移っていく。丁度それが次に載せる「河内湖1の時代」<sup>注11</sup>である。

この時期に記紀に記載されているような依網池の造築があり、そしてそれに伴って依網地方はしだいに池を中心とした生活へと移っていったと思われるのである。さて、この古地理図で依網池は、南から北につき出した半島を形成する上町台地の基部にあり、「遺里小野」遺跡の近くに位置していた。これからは大阪湾の海岸線がかなり近くに迫っていることがわかる。一方、依網池は人工池であるので水を貯めやすい所、つまり低地に造

ったと思われる。依網池を中心に生活する人々にとっては、この歌垣の行われたのが、水辺であっても小高い所であっても成しえると言えよう。

ここでもう一度歌謡自体にもどって考えてみたい。最初に述べたようにこの歌謡は記紀の比較において二つの問題を持っている。一つは、歌い手が違うということ。いま一つは、「今ぞ悔しき」の句の有無である。「記」の方は前の記43歌謡に続いて「又御歌日みしたまひしく、」とあり、応神天皇が連作された形をとっていて、「今ぞ悔しき」の句がある。「紀」の方はと言えば、「是に、大鷗尊、御歌を蒙りて、便ち髪長媛を賜ふこと得ることを知りて、大きに悦びて、報歌たてまつりて日したまはく、」とあって、「今ぞ悔しき」の句はなく、大雀命の歌になっているのである。先にみてきたように、本来歌垣の歌であったものを物語に挿入したのであるならば、そこにヒズミが生じるのは当然のことといえよう。確かに前述のように歌垣の歌とこれをとるなら、自分の想う女性がすでに他人のものであるのだから「悔しい」というのはうなずける。「評釈」も「本来は『今ぞ悔しき』と云う句を持つ恋愛歌であったとみるべきであろう。」と述べている。しかし物語に即応させてみる場合、すんなりと讀つたのに対して、この言葉はおかしいと思

われる。そのことについて『全注釈<sup>記</sup>』は、「応神天皇が髪長比売をすでに自分のものにしてしまったとか、他人にやってしまったとか、取り返しのない時にこそ『今ぞ悔しき』というのであって、比売を皇太子に与えようとしている『今』の時点では、この言葉はピンとこない。」と述べている。また、歌全体を見渡すときに、「記」よりも「紀」の方が歌自体の意味がよく通じると思われるのである。例えば、「尊繰り」を『全注釈<sup>記</sup>』では、「尊を繰ることや尊を繰る人ではなく、尊そのものをいう。」とあるにもかかわらず、前二句と対句をなしているということから、これを「尊を手繰って取る人の意に解釈するほうが自然」としている。また「延へ」だけで、「手を」伸ばす意とするのは無理なところもあるが、他に適当な解釈も得られないので、「応そうしておきたい。」とする。しかしそれが「紀」であれば、「尊繰り延へけく」は尊の茎が水中で長く伸びていることとして無理なく解釈できるのである。こうしてみると、「紀」の歌には、もともと「今ぞ悔しき」の句があったと思われる。そしてそれがこの歌の原形であったのであろう。それが物語に取り入れられる時、物語の意味が通じやすいように削られたのだと思われる。

また更に、歌い手が違う点についてであるが、物語自体が

〔「妻争い」の物語であるのが〕円満に解決したことを考えれば、大雀命が歌ったとする方がすっきりとするのではないかと思われる。第一、『全注釈』が述べるように応神天皇が大雀命の心を知らなかったことを悔むというのは、非常におかしなことである。それよりも、大雀命が父である応神天皇の心を知らなかつたことを悔む方が、物語らしいのではないだろうか。またそう解釈する方が、ずっと物語と歌との間のヒズミが少なくなるのである。こう考えてみて、私は『紀』の歌の方が原形に近かつたと思うのである。私と同じ意見は、諸注では『全注解』のみである。

#### 四

次に、この二首の歌と物語との結びつきを考えてみたい。この歌垣の歌二首が物語に取り入れられたのは、まず記43には「香くはし 花橘」とあり、日向から来た美しい女性を連想したからだと考えられる。そして二人の男性が一人の女性を争い合うという内容から記44が連想されたのであろう。またこれは、特に地理的な近さにも関係していると思われるのである。その物語部分を全文掲げて、記紀の両物語を最初に提示した建内宿

禰大臣の登場も含めて考察していこう。

天皇、日向国の諸縣君の女、名は髮長比売、其の顔容麗美しと聞し看して、使ひたまはむとして喚上げたまひし時、其の太子大雀命、其の嬪子の難波津に泊てたるを見て、其の姿容の端正しきに感でて、即ち建内宿禰大臣に詔へて告りたまひけらく、「是の日向より喚上げたまひし髮長比売は、天皇の大御所に請ひ白して、吾に賜はしめよ。」とありたまひき。爾に建内宿禰大臣、大命を誦へば、天皇即ち髮長比売を其の御子に賜ひき。賜ひし状は、天皇豊明聞し看しし日に、髮長比売に大御酒の粕を握らしめて、其の太子に賜ひき。

十三年の春三月に、天皇、専使を遣して、髮長媛を徴さしむ。

秋九月の中に、髮長媛、日向より至れり。便ち桑津邑に安置らしむ。爰に皇子大鷦鷯尊、髮長媛を見すに及びて、其の形の美麗に感でて、常に恋ふ情有します。是に、天皇、大鷦鷯尊の髮長媛に感づるを知しめして配せむと欲す。是を以て、天皇、後宮に宴きこしめす日に、始めて髮長媛を喚して、因りて、宴の席に坐らしむ。



そもそもこの物語は、天皇と皇太子との間で発生した出来事  
の美談を伝えるためのものであると思われる。ところが『記』  
の方には建内宿禰大臣を登場させて「妻争い」が例外的な円満  
解決をみたように伝承されている。そのことについて『評釈』

は、『記』の場合、父は恋を譲って、子に祝福を送りながらも  
自分の内心を吐露し、悔恨と遺憾の意を示している。それは人  
間的な感情であるが、それでも円満解決をみたのは建内宿禰を  
通しての交渉があったからだ、という。そして「そこに宮廷内  
の長老として、内紛を未然に防いだ調停者、建内宿禰の面目が  
あった。」というのである。更に『紀』のような物語の形式で  
は、建内宿禰の登場を必要とする形から、しない形が生まれる  
可能性はあっても、その逆の経路は、まず考えられぬであろう。  
と述べられている。このことからみれば、この物語の英雄は建  
内宿禰大臣であると断言できるほどである。確かに建内宿禰大  
臣は、孝元記にその名が初めて記されて以来、成務天皇の御代  
に大臣となり、仲哀天皇、神后皇后、応神天皇、仁徳天皇の御  
代にわたって活躍する近侍の臣である。その各朝にも建内宿禰  
大臣についていろいろな伝承があるので、この物語もそうであ  
ると考えられなくもない。しかし孝元記に建内宿禰大臣の系譜

が記されていることに、諸注は「異例」<sup>注12</sup>としている。記紀が天  
皇家を中心として書かれた書物であるならば、天皇の寛大さ、  
皇太子の実直さを語る『紀』の伝承と、建内宿禰大臣の活躍を  
語る『記』の伝承とは、どちらがその意になうか明確であ  
ろう。

こう考えてみると、『紀』の伝承の方が、『記』の伝承より古  
い形式をとどめているといえるのではないだろうか。つまり  
「妻争い」の事件が起こり、それが円満解決をみたので、両者  
の心を代用する歌謡を結びつけ伝承されていたが、円満解決が  
例外的であったために、一人の英雄を配して伝承し、その英雄  
がある氏族と結びついた。という氏族伝承の形で、『記』に記  
載されるようになったと思われるのである。

## 五

このように歌の原形を考え、物語の原形を考えてそれらの結  
びつきを考察してきたのだが、ここでもう一度全体の考えをま  
とめておこう。

一首目の原形は、歌垣の時に女性が歌う歌と考えてみた。そ  
れも若い女性で、歌垣に参加する若い男性に対しての勧誘歌で

あろうと考えられる。そしてこのことから記紀を比較してみても、それは『記』よりも『紀』の方が古い形を残していると思われる。

次に二首目の原形は、やはり歌垣の時に男性が歌う歌と考えてみた。ただし前には老若の区別は言わなかったが、ここは若い男性の精一杯の悔しさを表わした歌と解釈しておきたい。記紀の比較においては、「今ぞ悔しき」の句と、歌い手などから、これも『記』よりも『紀』の伝承の方が古い形を残していると思われる。

最後に物語であるが、建内宿禰大臣の登場から、更には髪長比売の泊っていた場所が、『記』では「難波津」、『紀』では「桑津邑」とあり、「桑津邑」の方が、「依網」に近いことから、依網地方の歌垣の歌であったと思われる二首目の歌と結びつきやすかったことと考え合せて、やはり『記』よりも『紀』の方が古い形を残していると考えられるのである。

以上のことから、最初に提出した——どちらの所伝がより長く古い形体を残しているか——という問題は、『紀』の方がより古い形体を残していると考えられるのではないか、という結論を得たのである。しかし、これはあくまでも一つの試論にすぎず、まだまだ検討を重ねなければならない点が多く残っている。

る。今後、記紀に載る伝承の原形に少しでも近づけることを課題として研究していきたいと思う。

注1 物語中の人物名は、引用部分以外全て「古事記」の表記に従う。

注2 日本古典文学大系本「古事記・祝詞」及び「日本書紀上」引用。

尚歌謡番号は同「古代歌謡集」による。また「歌謡」を省略する場合もある。更に「古事記」は「記」、「日本書紀」は「紀」とし、共に指す時は記紀とする。

注3 「古代歌謡と儀礼の研究」四六八頁。

注4 「記紀歌謡評釈」より引用。以後「評釈」とする。

注5 「記紀歌謡全註解」より引用。以後「全註解」とする。

注6 土橋寛著「古代歌謡全注釈 古事記編」

契沖著「厚顔抄」。

注7 本居宣長著「古事記伝」及び橋守部著「秘感言別」。

注8 武田祐吉著「記紀歌謡集全編」。

注9 「古代歌謡と儀礼の研究」四八二頁。

注10 梶山彦太郎・市原実著「大阪平野の発達史——C年代データからみた——」(「地質学論集」第七号)一九七二年十二月)の第九図。

注11 諸注の内、大系本(一七二—一七三頁)の頭注二〇には、「臣下である武内宿禰の系譜を挙げているのは異例である。これはその子孫が後の藤原氏のように、外戚として権勢をほしいまま

にしていたからである。」とある。